

# 漱石と進化論

小澤 萬記

(人文学部国際社会コミュニケーション学科)

## Natsume Soseki and Evolutionism

Kazunori OZAWA

(Department of International Studies, Faculty of Humanities and Economics)

### 目 次

はじめに

- 1 「進化」について
- 2 「遺伝」について
- 3 「生存競争」について

### はじめに

モースによる紹介以来、進化論が日本社会に急速に浸透していったことはすでに何度も指摘されているとおりである。<sup>(1)</sup> そのような浸透の一つの例として、本稿では、夏目漱石と進化論の関係を検討する。日本への進化論の紹介時期は漱石の少年期・青年期とほぼ重なる。モースによる最初の進化論講義が行われたのは、漱石10歳の年、1877年(明治10年)である。また、1883(明治16年)の『動物進化論』(モース述、石川千代松筆記)の出版は漱石の大学予備門入学の前年である(この前年には加藤弘之による『人権新説』が出版されている)。松山中学赴任(1895)の翌年には『生物始源』(ダーウィン『種の起源』の翻訳)が発行されている。

したがって、進化という言葉自体もその内容も、漱石においては常識の部類に属する事柄であった。イギリスで下宿の女将から「evolutionといふ字をご存知ですかときかれた」<sup>(2)</sup>(倫敦消息)とある種の憤りをこめて書き残しているのもそのような事情を物語っている。

また、蔵書に例えば以下のような本が含まれていることから、漱石が進化論に一定の関心を持っていたことを示している。<sup>(3)</sup>

Darwin, The Origin of Species, London 1902

The Descent of Man, and Selection in Relation to Sex, London 1901

Weismann, A Theory of Heredity London 1893

とすれば、そのような進化論との関わりは彼の作品にどのように反映しているのであろうか。以下の章で漱石と進化論との関わりを具体的に検討する。

## 1 「進化」について

漱石の作品の中で「進化」という言葉は極めて多用されているとあって良いだろう。特に『吾輩は猫である』には頻出する。たとえば、金田邸に忍び込む猫は自分の行動について以下のように論評する。

三度以上繰り返すとき始めて習慣なる語を冠せられて、此行為が生活上の必要と進化するのも亦人間と相違はない。<sup>(4)</sup>

迷亭による、知人老梅に対する評。

先生其昔静岡の東西館へ泊つた事があるのさ。— たつた一晚だぜ— 夫で其晩すぐにその下女に結婚を申し込んだのさ。僕も随分呑気だが、まだあれほどには進化しない。<sup>(5)</sup>

自分が泳がないことについて。

進化の法則で吾等猫輩の機能が狂瀾怒涛に対して適當の抵抗力を生ずるに至る迄は一換言すれば猫が死んだと云ふ代りに猫が上がつたと云ふ語が一般的に使用せらるゝ迄は一容易に海水浴は出来ん。<sup>(6)</sup>

という具合である。

だが、これらの例で見ると、「進化」という言葉は作品中で必ずしも不可欠な概念として使われているというわけではない。いわば、最新の流行語として使われているのみであり、その意味で極めて通俗的な使い方である。また、「行人」の主人公二郎の兄（一郎）は「遺伝とか進化とかに就いての学説」を得意とする「学者」「見識家」「詩人」として描かれているが、その進化への言及は、「男は情欲を満足させる迄は、女よりも激しい愛を相手に捧げるが、一旦事が成就すると其愛が段々下り坂になるに反して、女の方は関係が付くと夫から其の男を益々慕ふようになる。是が進化論から見ても世間の事実から見ても、實際ぢやなかろうかと思ふのです。」<sup>(7)</sup> というような進化論（雌雄淘汰論）の通俗的理解の範囲を出るものではない。

このような用法は、厳密な生物学上の概念としてよりも、多様な意味を背負った同時代のこの言葉の使われかたに対応したものである。例としてあげたのは、ほぼ「変化」と同義で使用されている場合であるが、これ以外に以下のような使い方を確認できる。

吾輩は猫として進化の極度に達して居るのみならず、脳力の発達に於ては敢て中学の三年生に劣らざる積りであるが、悲しいかな咽喉の構造が人間の言語が饒舌れない。<sup>(8)</sup>

過去の時間的経過全体に対する「進化」概念の適用の例もある。

進んで無機有機を通じ、動植物界を貫き、それ等を万里一条の鉄の如くに隙間なく発展して来た進化の歴史と見做すとき、さうして吾人人類が此の歴史中の単なる一頁を埋むべき材料に過ぎぬことを自覚するとき、…人間の自惚は又急に脱落しなければならない。<sup>(9)</sup>

また、元来が自然科学上の概念であった進化ということばが、「文芸の進歩」というような意味にも転用されるのは漱石に特異な現象ではない。focal idea (F) について以下のように述べている。

スナワチFが単に変化したるのみにて進化をも何も意味せざるときに於いてすら進歩なりと信ずるが故に過去のFを皆輕蔑するなり。<sup>(10)</sup>

進化をプラスの価値をもった「進歩」の過程ととらえるか、価値中立的な「変化」の過程ととらえるかは、重要な相違である。進化論発表当時のヨーロッパでもそうであったように、それを受け入れた日本においても、進化が進歩のプロセスを含むという暗黙の前提に基づいて進化論が語られていた。ここでのこの言葉の使われ方から推定すれば、漱石の進理解もその範囲にある。だが、単に進化が一義的に「善なることがら」ととらえられているわけではない。プラスの意味を持った「進化」という言葉とは対照的な意味を持った「退化」という言葉の使われ方に注目してみよう。

何故と云ふに人間は進化と退化とを想ひ違ひすることが往々あり、且兎角現在を標準としたがる癖があるからである。<sup>(11)</sup>

代助は平岡のそれとは殆んど縁故のない自家特有の世界の中で、もう是程に進化——進化の裏面を見ると、何時でも退化であるのは、古今を通じて悲しむべき現象だが一進化したるためである。<sup>(12)</sup>

すなわち、両者は対立するものというよりも、一つの現象の表裏をなすもの、プラスとマイナスの2つの側面を表現した言葉ということが出来る。すなわち、「勝者は必ず敗者に了るものに御座候。金や威力の勝者は必ず心的の敗者に了るが進化の原則と思ひ候。」<sup>(13)</sup>（小宮豊隆宛書簡 明治41年5月6日）と述べられているように、進化とは必然的な変化のプロセスである。特にそれをプラスの側面で捕らえたときに、進歩と同義でこの言葉が使われる。だが、「進化」はただ単にプラスのものとして考えられているわけではない。そこには、常にマイナスの側面が存在する。「進化の裏面を見ると、何時でも退化である」わけである。漱石に「退化」の一つのイメージを与えたものとして、M.ノルダウの『退化論』（Degeneration）の名を逸することはできない。この本について漱石がしばしば言及していることは既に指摘されている通りであるが、<sup>(14)</sup>「明治30年代校半から大正初期にかけて、日本でもさかんに読まれた」（藤尾）この本の漱石に対する影響は単に「世紀末芸術に対する入門書」というには留まらなかったといえるだろう。

このような進化と表裏一体をなす現象としての「退化」を裏に含むものとしての進化は、漱石の進化観の一面を特徴づけるものである。

## 2 「遺伝」について

進化という言葉の作品中での使われかたについては1で確認した。本章では、「進化」と密接な関わりを持つ「遺伝」という言葉に目を転じてみよう。メンデルの法則の「再発見」は1900年であり、これもまた、創作活動を開始した当時の漱石にとって最新流行の概念であったといえる。

だが、畔柳茶舟宛て書簡（1914年・大正3年1月13日）の中で「僕はメンデリズムと文芸などとは今の所到底結びつけて考えられるものではないと考えてゐますがね。」<sup>(15)</sup>と述べているように、漱石は遺伝理論をそのまま文芸に適用することについて懐疑的であったことを確認しておく必要が

ある。しかし、このことは彼が遺伝について興味を持っていなかったということの意味しない。「遺伝」についての言及は、創作にも、書簡にも頻繁に見出すことができる。

倫さんの手紙によると筆は何か大変な強情ばりの容子だ男子は多少強情がなくては如何が女が無暗に強情ではこまる又之を直すに無暗に押入れに入れたりしては如何よ仕置も臨機応変にするのはいいがただ厳しくしては如何ぬ子供は遺伝によるは勿論であるが大体六七歳迄が尤も肝要の時機だから決して瞬時も油断をしては如何ん可成スナホな正直な人間にする様に工夫なさい。  
(鏡子宛書簡)

というような使い方は、1で見た「進化」という言葉と同じように通俗的常識的用法である。

更に、漱石における遺伝という言葉の用法の特徴の一つはそれが、「病氣」のイメージと結びついていることである。例えば再び、『猫』である

かかる遺伝は潜伏期の長いものですから、いつ何時気候の激変と共に、急に発達してご母堂のそれの如く、咄嗟の間に膨張するかも知れません、<sup>(17)</sup>

ここでは明確に病氣として言及されているわけではないが、「潜伏期」ということばから病氣との連想は明らかである。さらに、『野分』は遺伝ということばが頻出する作品の一つであるが、そこにおいて登場人物高柳は言う「遺伝です。親父は肺病で死にました」<sup>(18)</sup>

このような病氣と遺伝との結びつきは、「遺伝病」という連想から来るものに他ならないが、それはまた「遺伝」がこの時代に問題となる局面が「病」（結核のように、そのいくつかは実際には遺伝とは無関係だったのだが）とかかわった場面であったことをよく示している。一方、当然の事ながら、遺伝は常に病氣と対で語られるわけではない。

父母から受けた遺伝的の性質などが判然とわからぬ以上は、其人の生涯を貫く言動の傾向も確と分る者ではない。<sup>(19)</sup>

このような見方からは、登場人物の性質を遺伝という形で説明することが科学性（客観性、普遍性）を保証するという考え方が生ずるだろう。

其上敬太郎は遺伝的に平凡を忌む浪漫趣味の青年であつた。<sup>(20)</sup>

さう云へば、遺伝だかなんだか、叔父さんにも貧乏な割にはといつては失礼ですが、何処かに贅沢な所がある様ですし、<sup>(21)</sup>

どうして？ すかね。遺伝かもしれません。それでなければ小供のうち何かあつたんでせう<sup>(22)</sup>

だがこれらの例における「遺伝」という言葉の使われ方にはもうひとつの意味がある。それは「血のつながり」を暗示するという働きである。それを更に押し進めると、以下のような用法に結びつくことになる。『野分』の先ほど引用した箇所の直後に高柳は言う。

先生、罪悪も遺伝するものでせうか<sup>(23)</sup>

これは、いわば「因果応報」を遺伝で説明しようと言う立場に他ならない。このような考え方の一つの頂点が、『趣味の遺伝』である。

旅順で戦死した亡友「浩一」と彼の日記に出てくる「郵便局の女」との不思議なつながりを、語り手は、「余が平生主張する趣味の遺伝という理論」で説明しようとする。すなわち二人の数代前の男女が互いに恋愛関係にあったのが「父母未生以前に受けた記憶と情緒」として二人の脳に再現した結果であるとする。

昔はこんな現象を因果と称へて居た。因果は諦らめる者、泣く子と地頭には勝たれぬ者と相場が極つて居た。成程因果と言ひ放せば因果で済むかも知れない。然し二十世紀の文明はこの因を極めなければ承知しない。しかもこんな芝居の夢想的現象の因を極めるのは遺伝によるより外に仕様はなからうと思ふ。<sup>(24)</sup>

このような筋立ての物語であるから、作中には遺伝に関わる言葉が頻出し、漱石が当時読んでいたと推測されるメンデル、ヴァイスマン、ヘッケル、ヘルトウィツヒ、スペンサー、リードなどの著作について、語り手は「研究を始めた」という設定になっている。だが、これほど全面的な遺伝学の取り入れの試みはこの一作で終わっている。以後漱石は遺伝によって文学をうらづけようという試みを全面展開することはない。

総じて、「遺伝」という概念の作品中での機能は1で見た「進化」より大きい。また、それは科学の時代の最新流行の分析概念であり、遺伝病という負の側面を持っているという点において、「進化」という言葉の使われ方といくつかの共通点を持っているということも言えるだろう。

### 3 「生存競争」について

1, 2で見たように、漱石において、「遺伝」という概念はいくつかの作品の核となっている。他方、「進化」という概念は、多用されてはいるが必ずしも作品にとって欠くことの出来ないものというわけではない。しかし、そのことから漱石において進化論が重要な役割を果たしていないと結論することはできない。本章ではこれまでの議論を踏まえて、「生存競争」という概念の使われ方について検討する。それはダーウィン進化論の最も中心的な概念の一つであり、その背景にある世界イメージの核であった。さらに、19世紀西欧の時代思潮の中で、更には文明開化期の日本でも重要な役割を果たした概念でもある。

実際余と余の妻とは、生存競争の辛い空気が、直に通はない山の底に住んでゐたのである。<sup>(25)</sup>

泰西の文明の圧迫を受けて、其重荷の下に唸る、劇烈な生存競争場裏に立つ人で、真によく人の為に泣き得るものに、代助は今だ會て出遭はなかつた。<sup>(26)</sup>

「文明の圧迫が烈しいから上部を綺麗にしないと社会に住めなくなる。」「其代り生存競争も烈しくなるから、内部は益々不作法になりまさあ」（略）「今に人間が進化すると、神様の顔へ豚の糞丸をつけた様な奴ばかり出来てそれで落付きが取れるかもしれない。」<sup>(27)</sup>

「競争」というのもしばしば登場する観念である。例えば、「文壇の趨勢」と題された1909年、明治

42年1月1日の談話がある。ここでは、全集版で4ページ程度の長さに競争ということばが26回も使われている。<sup>(28)</sup>

【猫】にも、

要するに主人も寒月も迷亭も太平の逸民で、彼らは糸瓜の如く風に吹かれて超然と澄し切つて居る様なものゝ、其実は矢張娑婆気もあり慾気もある。競争の念、勝たうへの心は彼等が日常の談笑中にもちらちらとほのめいて、一步進めば彼等が平常罵倒して居る俗骨共と一つ穴の動物になるのは猫より見て気の毒の至りである。<sup>(29)</sup>

あるいは、

世界が化物になった翌日から又化け物の競争が始まる。着物をつけて競争が出来なければ化物なりで競争をやる。赤裸は赤裸でどこ迄も差別を立て、くる。此点から見ても衣服は到底脱ぐことは出来ないものになつて居る。<sup>(30)</sup>

などという言葉が見られる。これらの「競争」という言葉の使われ方から直ちに看取されることは、一方で必然的なプロセスと考えてもいた競争の負の側面に彼がこだわりつづけていたことである。そしてそれは「進化」が常にその裏面に「退化」の側面を持っていることを漱石が認識していたのと同様である。更に、このような競争が持っている負の側面については以下のような直接的な言及も見出すことが出来る。

さうすると被投票者は自己の眞実価で競争する必要がなくなつて来て、只表面上の数字で競争さへすれば済む訳になるから、其競争は内容の優劣ではなくつて、金力の勝負に帰着して仕舞ふ。<sup>(31)</sup>

競争あるいは生存競争に対する呪詛の言葉は、公刊された文章よりも、断片的に残されている覚書やメモの類の中に数多く見られるのも、注目すべき事実である。

人 honest ナル者が世ニ用ラザルヲ見テ不思議ニ思フ誤レリ当然ノコトナリ是ハ chance ニアラズ struggle for existence ノ大勢ナリ如何トナレバ法螺ヲ吹き虚飾ヲ事トスルハ己レヲ as it is ヨリモ better ニ見セントカムルカ又ハ見セル者ナリ better に人ニ見ユル者ハ as it is ヨリモ受ヨキ道理ナリ。<sup>(32)</sup>

しかし、漱石は競争原理自体を否定できると考えているわけではない。ただ、本来の選別原理が働いていないという次のような論理でもって競争の結果を批判するのである。

即チ愚ナル世間アルガ為ニ競争ノ selective principle が軌道ヲハズレタルナリ。<sup>(33)</sup>

進化が避けられないように現代世界において競争もまた避けられないとの認識がこの背後にある。すなわち、「凡テノ競争ハ生キングガ為ノ競争ニシテ凡テノ徳義モ亦生キングガ為ノ徳義ナリ」とすれば、いかに望ましくない結果がそれによってもたらされようと、競争は避けられないという認識である。「生存競争」、あるいは「競争」という言葉は明確な価値判断と強い思い入れを伴って使われている。

その点で、1で見た「進化」という言葉の使われかたと対照的である。「進化」という概念は結局のところある種の小道具に過ぎない。そして、総じて「進化」という言葉が公表を前提とした小説に多用されるのについて、「生存競争」は小説のみでなく個人的な覚書の類にも頻出する。それは、この概念が漱石の内面と（それがいかに「世間」から侵食されたものであるにせよ）深くかかわっていることを示してもいるだろう。

ここで漱石の文明論的著作物に目を転じて見よう。

開化の潮流が進めば進む程又職業の性質が分れ、ば分れる程、我々は片輪な人間になつて仕舞ふという妙な現象が起るのであります、言ひ換へると自分の商売が次第に専門的に傾いてくる上に、生存競争の為に、人一倍の仕事で済んだものが二倍三倍乃至四倍と段段速力を早めて遂付かなければ成らないから、<sup>(34)</sup>

漱石の文明観の背後には、19世紀末の時代思潮を支配した「生存競争によって満たされた世界」という世界イメージがある。とすれば、彼の議論に生物学者のそれと多くの共通項があるのは不思議ではない。

生存競争が劇甚となって、はげしく競争せねば自分の生存が危ういという不安の念が一刻も念頭を離れぬようになると、無意識に競争していたときとは違い、ただそれだけでもはなはだしく神経を刺激するが、人間が便利あるいは娯楽のために造る器械も、またはげしく神経を刺激するものばかりである。(略)かく神経系に対する刺激が多すぎるために神経は次第に衰弱し、その働きが過敏となり、病的となってささいなことをもはなはだしく気につけ、わずかなことをも非常に心配し、少しく逆境に立つとたちまち失望落胆し、あるいは自暴自棄となって、軽々しく自殺し、もしくは重罪を犯すようになる。今日でも統計の示すところによると、精神病者、自殺者、犯罪者の数は一年ごとに増してゆくが、今後はその原因が増加するに従い、さらにいっそうはなはだしくなるものと覚悟せねばならぬ。<sup>(35)</sup>

既に開化と云ふものが如何に進歩しても、案外其開化の賜として吾々の受くる安心の度は微弱なもので、競争其他からいらしななければならない心配を勘定に入れると、吾人の幸福は野蛮時代とさう変りはなささうである事は前御話しした通りである上に、今言つた現代日本が置かれたる特殊の状況に因つて吾々の開化が機械的に変化を余儀なくされる為にただ上皮を滑つて行き、又滑るまいと思つて踏張る為に神経衰弱になるとすれば、どうも日本人は気の毒と言はんか憐れと言はんか、まことに言語同断の窮状におちいつたものであります。<sup>(36)</sup>

前者は生物学者丘浅次郎によって1906年に書かれた文章。後者は漱石の講演「現代日本の開化」(1911)の一節である。両者の議論の相似性についてはすでに別の場所で述べた。<sup>(37)</sup> 文明化（開化）の必然性を背景とする、(生存)競争の激化、精神の病の蔓延、希望の乏しい未来という、二つの議論の基本的な流れは同一である。漱石および丘の文明論の根底にある必然的だが否定的な契機としての「生存競争」という観念の共通性が、この相似のそもそもの出発点である。さらに、現代人の精神の有り様を「ヒステリー」や「神経衰弱」によって特徴付けようとするのは、既に触れた「退化論」の議論の中心である。一方、丘もまた人類の退化について語っており、そこから出てくる未来イメージが両者に共通したものとなるのは当然のことであった。

見てきたように、「進化」という概念は一見すると漱石の著作の表層とのみ関わるかに見えるのに

反して、その中心にある「生存競争」の概念は、漱石の文明観の形成と密接に関わっている。漱石の世界イメージの核にある「生存競争」に満たされた世界には二面性（必然性と否定性）が共存しており、それは進化と裏腹に「退化」が常に存在するという認識と対応している。そして、このような世界イメージが漱石文明論のペシミスティックな性格の基底をなしている。このようにして進化論は「生存競争」の概念を媒介にしていれば間接的にはあれ漱石の作品世界に大きな影響を及ぼしているのである。

## 注

- (1) 日本への進化論の紹介の諸相については、磯野直秀「進化論の日本への導入」、『共同研究モースと日本』（守屋毅 編）、小学館、1998 参照
- (2) 「倫敦消息」、『漱石全集』第12巻、岩波書店、1994、18ページ
- (3) 「漱石山房蔵書目録」、『漱石全集』第27巻、岩波書店、1997年による。
- (4) 「吾輩は猫である」、『漱石全集』第1巻、岩波書店、1993年、140ページ
- (5) 同 248ページ
- (6) 同 268ページ
- (7) 「行人」、『漱石全集』第8巻、岩波書店、1994年、257ページ
- (8) 「吾輩は猫である」、『漱石全集』第1巻、岩波書店、1993年、124ページ
- (9) 「思ひ出すことなど」、『漱石全集』第12巻、岩波書店、1994年、380ページ
- (10) 「ノート」、『漱石全集』第21巻、岩波書店、1997年、310ページ
- (11) 「英文学形式論」、『漱石全集』第13巻、岩波書店、1995年、291ページ
- (12) 「それから」、『漱石全集』第6巻、岩波書店、1994年、28ページ
- (13) 『漱石全集』第23巻、岩波書店、1996年、189ページ
- (14) 藤尾健剛、「漱石とM. ノルダウ『退化論』」、『香川大学国文研究』第15号、1990年
- (15) 『漱石全集』第24巻、岩波書店、1997年、251ページ
- (16) 『漱石全集』第22巻、岩波書店、1996年、241ページ
- (17) 「吾輩は猫である」、『漱石全集』第1巻、岩波書店、1993年、138ページ
- (18) 「野分」、『漱石全集』第3巻、岩波書店、1994年、385ページ
- (19) 「文学評論」、『漱石全集』第15巻、岩波書店、1995年、250ページ
- (20) 「彼岸過迄」、『漱石全集』第7巻、岩波書店、1994年、12ページ
- (21) 「彼岸過迄」、『漱石全集』第7巻、岩波書店、1994年、338ページ
- (22) 「野分」、『漱石全集』第3巻、岩波書店、1994年、370ページ
- (23) 「野分」、『漱石全集』第3巻、岩波書店、1994年、386ページ
- (24) 「趣味の遺伝」、『漱石全集』第2巻、岩波書店、1994年、234ページ
- (25) 「思ひ出す事など」、『漱石全集』第12巻、岩波書店、1994年、406ページ
- (26) 「それから」、『漱石全集』第6巻、岩波書店、1994年、140ページ
- (27) 「虞美人草」、『漱石全集』第4巻、岩波書店、1994年、349ページ
- (28) 『漱石全集』第25巻、岩波書店、1996年
- (29) 「吾輩は猫である」、『漱石全集』第1巻、岩波書店、1993年、81～82ページ
- (30) 同 289ページ
- (31) 「太陽雑誌募集名家投票に就て」、『漱石全集』第16巻、岩波書店、1995年 276ページ
- (32) 「ノート」、『漱石全集』第21巻、岩波書店、1997年、680～81ページ
- (33) 「ノート」、『漱石全集』第21巻、岩波書店、1997年、664ページ
- (34) 「道楽と職業」、『漱石全集』第16巻、岩波書店、1995年、402ページ
- (35) 丘浅次郎、『丘浅次郎著作集 進化と人生』、有精堂、1968年、17ページ
- (36) 「現代日本の開化」、『漱石全集』第16巻、岩波書店、1995年、438～9ページ
- (37) 丘浅次郎の文明観については、拙稿「丘浅次郎の進化論」、『高知大学学術研究報告 第46巻』、1997、参照  
平成12年(2000)9月30日受理  
平成12年(2000)12月25日発行